

2018年 高等学校の部 最優秀賞

「許す心」を探して

広島県福山市 盈進高等学校 2年生
前原 未来（まえはら みき）

私は少し、私の中の「許す心」がわからなくなっていた。

2009年、オバマ前米国大統領がプラハで「核なき世界」を宣言した。その後、ノーベル平和賞を受賞した。彼は2016年5月、現役の米国大統領としてはじめて、被爆地・広島を訪れて、原爆死没者慰霊碑の前で、目を閉じて頭を垂れた。

今年6月、トランプ米国大統領は、シンガポールで米朝首脳会談を開催し、「朝鮮半島の非核化」を約束した。しかし、彼は、核兵器のさらなる近代化を主張し、「脅しの平和」を強化して、「強い米国」をアピールしている。その「強さ」は、移民拒否や保護貿易などにみられる排外主義と、常に誰かを攻撃のターゲットにして、危機感をあおる政治手法で、意図的につくられていると、私は思っている。

核兵器の近代化など、もつてのほかだ。米国は再び、ヒロシマやナガサキの惨劇をもたらす準備をするのか。そう思うと私は、いまの米国も、原爆を落とした米国も「許せない」と思うようになってきた。そして、そんな自分に気づき、「許せない心」を、どう整理すればいいのかと迷っているとき、ふと、その本のタイトルが目飛び込んできた。

私の曾祖父は被爆者だ。あの日、28歳の曾祖父は、人手不足を補うため、鉄道関係の仕事で広島にいた。熱線は免れたものの、爆風によって倒壊した建物の破片で大けがを負った。そして、命からがら生きのびた。

曾祖父は私が生まれる前に亡くなった。自らの体験を、家族にも、断片的にしか語らなかつたようだ。あの日、地獄の広島を、思い出したくなかつたのだと、私は思う。

その本は、『8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心』。私は、進示さんの体験を通して、曾祖父の見た「あの日」の光景、「あの日」から続く苦しみを辿りたいと思った。そして、セピア色の写真で見た曾祖父を思い出しながら、私は、「許す心」を、進示さんの生きざまの中に探そうとしていた。

「黒焦げの火傷をした女性が裸同然で倒れている。ひどい火傷で背中が膨れ上がり、河馬のようになった年寄りがうつぶせに倒れている。雑踏の中に女の人が一人、立ちつくしていた。髪の毛は逆立ち、幽鬼のような顔立ちで宙を見つめ、金切り声をあげている。『子供が……子供が……子供が……助けられなかった……』彼女は泣きじゃくっていた」(39頁)。胸が苦しく、張り裂けそうになった。曾祖父もきっと、こんな光景を見たのだと思う。

私は、中学1年から、核兵器廃絶の署名活動に参加してきた。活動を通して、曾祖父が被爆者だということも知った。祖母と母が、そつと教えてくれた。

炎天下でも、雪が舞う厳寒の日でも、街頭に立ち、一筆一筆心を込めて集める。「核は必要だ」「中高生は家に帰って勉強しろ」など、厳しい言葉を浴びせられることもある。だが、その度に私は、元安橋で私の署名に応じてくださった一人の女性を思い出す。

「ごくろうさま。ありがとね。私は被爆者なんよ。あの日、爆風で割れたガラスがここ（首）に刺さったんよ。核はいらん。ピカはいらんのんよ。ピカで家族みんな死んだんよ。友達も死んだ。寂しかった。もう誰もこんな目におうちやいけん。そりゃあ、もう地獄やったよ。生き残ったんも、辛かった。でもね。家族や友達が私の命を守ってくれた、そう思うようにしとるんよ。明日は8月6日じゃけね、慰霊碑にお参りに来たよ」。この涙声は、今もはっきり覚えている。

そのときから5年。街頭で、何人もの被爆者に出合った。学習で、被爆証言も記録してきた。私は、曾祖父の証言を聞いていない分、どんな被爆証言もすべて、曾祖父の平和への思いとして受けとめている。そして、73年経ったいまも、その苦しみは進行形で、そのことが、「核兵器の非人道性」を物語っている、と私は思う。被爆者の苦しみを聞けば聞くほど、私の心に、「許せない心」が沈殿したのか。

「アメリカを憎むのは間違いだ。確かに原爆を落としたのはアメリカだが、アメリカ人を責めるべきではない。物事の全体を把握することが大切だ。悪いのはアメリカ人ではなく、戦争だ」

進示さんが私に語りかける。だが、どこかに「そんなことはわかっている」という、少し、拒否反応を覚える自分もいた。

しかし、私をはっとさせ、納得させてくれたのは、進示さんの次の言葉だった。「私は前を向いていたかった。敵が味方になるのを見たかった。平和が欲しかった」。そうなんだ。「許せない心」は、自分で自分の心に敵をつくることではないか。

そうして再び、進示さんが、ゆっくり語りかける。「あの朝八時十五分に、何も終わったりやあせん。わしの時計が消えても何も終わりやあせん。人生は続くんじゃ。わしとお前のつながり、わしらの願いや魂。これからもずっと続くんじゃ。お前の娘らがわしらから受け継いでくれるんじゃ」。

「おまえの娘」は私。そう確信し、これからは、進示さんの思いを抱いて、街頭に立とうと決意した。